巻頭言

学部長　村　瀬　智　子

2020 年 3 月 11 日、世界保健機関（WHO）によって新型コロナウイルス感染症のパンデミックが宣言され、現在もウイルスの変異株による脅威が私たちの日常生活に多大な影響を与えています。その日から丁度 9 年前の 3 月 11 日に、我が国は東日本大震災に見舞われ、原発事故に直面しました。近年、激しさを増す集中豪雨による大規模災害は、これまでの人類が歩んできた歴史の結果として露わになった地球温暖化が原因であると考えられています。これらは、いずれも想定外の災禍・地球環境問題として扱われています。

このように、これまでの人類が歩んできた歴史の結果として現れる影響は、大規模災害のように人間の「外」に現れる場合もあれば、精神の病のように人間の「内」に現れる場合もあります。しかし、その現れ方には一貫性があります。このことは、複雑な創発現象に潜む単純な普遍原理の探究が可能であるということを示唆しているのではないでしょうか。複雑な創発現象に潜む単純な普遍原理を探究するためには、単一の学問領域を超えた学際的研究、さらには人間学と自然学、芸術・教育学、宗教学、そして一般市民の実践知をも包括する超学際的な研究が必要不可欠です。

特に、本学は、赤十字の理念を建学の精神として看護学を学ぶ大学です。私たちには、赤十字人として、想定外の災禍・地球環境問題に影響され苦悩する人々を人道的に支援する使命があります。また、看護学は、看護の現象を探究する人間科学ですので、人間に関する幅広く深い知識をもつことが大前提です。人間と深く関わるさまざまな環境や、人間の認識の表現である文化や芸術について理解を深め、Art としての ‘技’ と Science としての ‘知識’ を統合した新たな知の創造とそれらの蓄積が求められていると言えます。

ここに、本学の紀要が看護学に寄与できる役割があります。すなわち、想定外の災禍・地球環境問題に関する “未知の未知” にゆだねる勇気を持ち、“未知の未知” の段階から新しい知を創造するプロセスを具現化する場と機会を提供することです。新しい知を創造するプロセスには絶対的な時間が必要です。しかし、研究プロセスを公表・共有する場と機会を持つことで、そこを足掛かりに、原石のような研究から完成度の高い研究へとつながる可能性が拡がります。

トルストイは次のように語りました。「音楽演奏はそれが芸術であるときのみ感染する。それは、いとも簡単に引き起こされているように思われるが、演奏者が限りなく小さなきっかけを見つけるその瞬間に生ずる。このきっかけを、外的形象によって教えることはできない。それは人間が感覚に身をゆだねるときにのみ見いだされるからである」（ヴィゴツキィ, 2006, p.198-199）と。

小さなきっかけとなる研究を大切にあたためながら、新たな知の創造へ向けて歩み続けましょう。